

## <輸出管理 Day for Export Control 2016>で紹介されました

2月26日開催の表題セミナーの席上、実行委員長松原幸夫先生の御講演（「該非判定データベースの現状と展望」）で、私の論考「[濃淡管理の意義と応用](#)」の一部が紹介されました。

松原先生からは今回のセミナーの全体テーマ「Smart & Cool Export Control（輸出管理をより速く、よりスマートに）」の設定に当たっても拙稿が参考になったという有難いお言葉もいただき、大変光栄なことであります。

折角なので、セミナーを聴講して感じたことを2つ記します。

第1は、大学の輸出管理担当の方々が「意外に」（失礼な言い方ですみません！）真摯に取り組んでいらっしゃることへの驚き（またも失礼！）でした。何分、大学での輸出管理は歴史も浅く、それに私のメーカー勤務時代は非常にたくさんの該非判定依頼を頂戴していたものですから、「なぜこんなにたくさん？ 頑張りすぎではありませんか？」などと罰当たりなことを思ったりもしていたのです。今回、先生方もメーカーへ依頼について（やりすぎかと）悩んでいらしたことを知り、自分がいかに狭い視野でものを見ていたか反省致しました。

「真摯」という点でもう一つ例を挙げると監査の問題があります。何名かの先生から「きちんと改善効果を出すための監査、それだけに中々実施に至らない」という御発言を聞き却って企業の方が「定期的実施という規定があるからそろそろやりますか、えーと実施要領は安検室の企業概要報告フォーマットをコピーして」と幾分惰性的な態度になりがちではないかと思ったことでした。

第2には、企業の輸出管理OBの方がたくさん大学で活躍されていることを初めて知りました。なるほど、腕に覚えの方々が個人のプライドもかけて頑張っているからこそそのような気合の入った雰囲気になるのだ、と納得しました。その反面、九大岡田先生の御講演でも指摘されていたことですが、現在御活躍の方々の任期満了後の管理パフォーマンスをどう保つか、すなわち継承問題の難しさも痛感しました。